

若衆のいる狂言舞台図

―新出の九枚目―

永 井 猛

東京文京区湯島美術商「株式会社 羽黒 洞 木村東介」に珍しい狂言の舞台図が所蔵（一部旧蔵）されている。

この舞台図については、『芸能史研究』第一三一号（平成7年10月）に「若衆のいる狂言舞台図―へ大小」の舞台図など」と題して八枚の図を写真入りで紹介したばかりなのだ、さらにもう一枚所蔵されていたことが判明したので、この紙面をお借りして紹介しておく。

新出の一枚を加えた九枚の図は、もとは六曲二双の屏風に貼られた十二枚一揃のものだったそうである。大きさは二種あり、いずれも縦は四十九センチだが、横が三十五センチのもの三枚と三十九・五センチのもの六枚とがある。この違いは屏風の両端の幅が狭くなっていたからで、本来は幅の狭いのが四枚、幅広のものが八枚あったはずである。

九枚とも構図は同じで、能舞台形式の張り出し舞台が中正面側のやや上方から眺めた角

度で描かれている。黒い縁のある板ぶき屋根の下から亀甲繋ぎとか藤などの模様の入った水引幕が見える。画面上方には金砂子を散らした薄青の横雲、下方には薄青の霞たなびく中に松や桜、柳などを配し、見所の観客は描かれていない。鏡板の場所に四季の草花を描いた屏風が立てられ、その前に肩衣をつけたりした前髪姿の若衆、地謡座に素袍上下に侍烏帽子姿の男たちが描かれ、絵によっては緋毛氈に座っていたりする。地謡座といっても笛柱がなく、後ろの欄干もない。

この若衆と男たちは役割が分からず、謎めいた存在なのである。囃子方が必要なのに若衆たちは楽器も持たず、地謡はいらないはずなのに男たちが座っている。彼らは横を向いたり扇をかざしたりと雑談に興じている風情でもある。舞台上とはいえ観客かもしれず、そうでなければ、地謡か、後見か、はたまた楽器の音を口真似して囃した連中なのでもあろうか。それとも単に絵をにぎやかにするた

めの絵師の創作なのであろうか。

役割不明ながら、若衆が舞台上に描かれていることに注目したい。というのは、九枚の絵の中に、狂言から歌舞伎に取り入れられて若衆歌舞伎の代表曲になり、そのため鬻流・大蔵流そして和泉流の所演曲として登録されることなく、台本も伝わらず、今もって謎に包まれているへ大小」の舞台図が含まれているからである。ただし、このへ大小」の図が狂言の段階にとどまるものなのか、若衆歌舞伎のものなのか、判然としない。服部幸雄氏が『歌舞伎成立の研究』（風間書房、昭和43）等で指摘された、歌舞伎に入ってからへの大小」の絵と一致する所から狂言というよりも歌舞伎の様を伝えるものかもしれない。

狂言へ大小」は三流以外の奈良の春日神社の禰宜役者たちが演じた南都禰宜流の得意曲だったらしく、禰宜の宗介という者が慶長八年（一六〇三）から同十五年までに演じたことが『古之御能組』（宮城県図書館伊達文庫蔵）等で確かめられる。

この九枚の図が同じ一座を描いたものならば、南都禰宜流の流れをくむ、狂言だけを演じる一座で、囃子方を持たず、座員に楽器の口真似をさせ、若衆の人氣で観客を呼んでいた「若衆狂言」の座か、またはその座が若衆歌舞伎に移行したての様子を伝えるものかも

しれない。

〈大小〉の図は、大きな御弊を肩に差しした若者が、黒地の素袍の右肩を脱ぎ赤地の縫箔の袖を翻し、紅白の扇を手にして舞い、それを袴に刀を差した二人の鼻髭のある男（一人は着座）が見ているものである。若者は服部氏が説かれるように月の大小を寿いだ舞を舞っているのであらうか。

さて、九枚の中には〈大小〉のほかにも、赤い塗笠をかぶった若者が頬紅をつけ、手を見せないように筒袖を垂らして日の丸の扇を持ち、膝を曲げたまま動き回る〈靱猿〉、初期歌舞伎の女形の右近源左衛門が舞った「海道下り」の伝承と共通する女（ピナンの前に垂らす布が狂言本来のものより短い）が三人出る〈若菜〉などがあって、歌舞伎の方へ踏み込んだ姿を伝えている。

この三枚は歌舞伎に近いが、一枚だけ逆に神事芸能に近い古い姿を伝えるものもある。烏帽子に面をつけた男が上半身裸で両手を広げ、黒い笠に向き合う。その笠の横で銅拍子を巫女が打ち鳴らすもので、天正狂言本以後の諸台本に見えない〈湯立〉の舞台図と思われる。諸肌脱ぎの神主が素手で釜の湯を跳ね上げ、邪気を払う様を描いたものであろう。

以上の四枚のほかは現行の狂言と大差のないもので、〈梟（梟山伏）〉〈武悪〉〈三人片

輪〉〈米市〉となじみ深い舞台図である。

さて、今回新たに所在の確認されたのは、縦四九センチ、横三九・五センチの図で、二人の僧が描かれている。舞台中央に薄茶の頭巾に十徳を着た僧が左手に鉦鼓を下げ、右手に撞木を持って立っている。この僧に向かかって、もう一人の僧（括り袴）が、シテ柱の方から低い体勢で食い付くかのごとく顔を突き出している所である。これは〈悪太郎〉の後半部分であらう。大酒を飲んで乱暴を働く悪太郎を改心させようと、酔い潰れて寝入ったのを幸い、伯父が悪太郎の頭を剃り僧体にして「汝が名を南無阿弥陀仏と付くるぞ」と言つて立ち去る。目覚めて驚くところに、出家が鉦鼓を鳴らし念仏を唱えて通り掛るので、悪太郎は早くも我が名を呼ぶとばかりに、出家のそばに行き返事をする。あきれれる僧が念仏を唱える度に悪太郎は返事をする、その場面を描いたものである。僧体となった悪太郎に大髭がないが、和泉流では髭も剃るようになっており、鷺流でも宝曆名女川本に「ひげはとる事も有、又とらずにも」とある。また、『狂言記外五十番』の挿絵にも髭がない。大藏流では笠を持つ事になっており、どうも大藏流の舞台ではないようである。

鏡板の部分に草花（薄か）を描いた屏風が立てられ、その前に前髪姿の若衆が三人座つ

てい。地謡座には緋毛氈が敷かれ、素袍の下に侍烏帽子姿の男たち五人が二列で座っている。前列三人の中央の男は扇を肩に隣の者に話し掛けている様子である。九枚の図の中で男たちが緋毛氈を敷くのはこの図だけで、三枚が若衆が緋毛氈を敷いている。屏風の横には紋の一部が見える幕が掛けられている。画面下には花盛りの桜と松が描かれている。

九枚の絵については、江戸時代初期の若衆の魅力売り物とした狂言の座が若衆歌舞伎に限りなく近付いた、または移行したの舞台図ではないかと推定している。

写真の手配から掲載の許可まで、お世話になった羽黒洞に対し厚く御礼申し上げる。

